

「なまじ (っか)」の意味・構文の史的変遷

林 禎 映

1. はじめに

近現代日本語の「なまじ (っか)」は、次の例のように、修飾内容に対して否定的な評価を表す陳述副詞として使われている。

- (1) 吟子の不安はなお続く。医師は誰に診て貰っていたのであろうか、荻野家かかりつけの万年翁は荻江とともに出京していてすでに俵瀬にはいない。あとはあの近辺に名の通った医者はいない。残っているのは古風な漢方医にすぎない。彼等で大丈夫だろうか、なまじっか医学を修めただけに吟子の不安はつきない。

(渡辺淳一『花埋み』1970年)

- (2) 「テレビのおかげで、余計生活が複雑になったわよ。昔は台風だって津波だって、来るまではわかんなかったものよ。なまじわかるから食べ物の買いだめをしたり外出をとりやめたりろくなことないわ」

(曾野綾子『太郎物語』1976年)

(1) は「医学を修めた」ことで却って医者への選別に不安がつきなくなるということであり、(2) はさまざまな情報が得られるテレビは本来なら普段の生活に役に立つものだが、いろいろなことを事前に「わかる」ことで、それが却って普段の生活を複雑にしまうことになるということである。いずれの例においても、「なまじ (っか)」は(1)の「医学を修めた」こと(2)の「わかる」ことを、それぞれ「不安がつきない」「ろくなことがない」という却ってよくない結果につながる、不適切で好ましくないものとして否定的に捉えている。このように「なまじ (っか)」は修飾内容とそれによって生じた却ってよくない結果という二つの事柄を関係づけるなかで働くもので、構文的には、上記の(1)(2)のような順接確定条件節のほか、順接仮定条件節や連体修飾節(および比較・選択構文のヨリ節)など、主に複文の従属節に用いられている。このような意味・構文上の特徴をもつ「なまじ (っか)」は、従来工藤浩(1982)では(慣用句的)否定の「叙法副詞」、渡辺実(1996)では「評価の副詞」として分類されている。

一方、歴史的に見ると、「なまじ (っか)」は単文構造のなかで「強いて・無理に・しぶしぶ行う様子」や「中途半端でいい加減な様子」を表す状態副詞用法で使われてい

る。前者の意味での使い方は近現代語には見られないが、後者の意味での使い方は次の(3)のように連体修飾の形で使われている。

- (3)「まあ、補助金問題は、これで忘れよう。われわれは独力でモルヒネに成功し、危機を乗り切って進んできた。政府からなまじつかかな補助金など、もらわないほうがいい。不平や依頼心は精神的な自殺のようなものだ。…」

(星新一『人民は弱し官吏は強し』1967年)

このように「なまじ(つか)」は使用当初、様態副詞用法として使われていたが、歴史的にある時期に文相当の事柄に対する否定的な捉え方を表す陳述副詞用法として使われるようになったと考えられる。そこで、本稿は「なまじ(つか)」がどのような変化過程を経て、様態副詞用法から近現代日本語のような否定的な評価を表す陳述副詞用法へ展開してきたのか、その歴史的な過程を追いながら、「なまじ(つか)」の構文やその修飾内容の意味的性質における変化の特徴を明らかにし、様態の意味をもつ語がどのように評価の意味を発生させていくのかについて考察することを目的とする。

その際、「なまじ(つか)」の機能の面での変化についても触れるため、連用修飾用法のほかに、連体修飾用法も考察対象とし、それに伴った「なまじ(つか)」の形態上に見られる変化(「なまじひに」「なまじひの」等)に留意しながら、「なまじ(つか)」の意味・構文上の史的変遷について考えていく。このほか、「なまじ(つか)」は最初「なまじひ(なましひ)に」から、後に「に」が脱落して「なまじい」、さらに「なまじ、なまじか、なまじつか」となったとされるが、このような形態上の変化については、各用例を言及する場合に限定して使用し、それ以外の場合は総称して「なまじ(つか)」を用いることにする。ただし、「なまじ(つか)」に付された漢字や濁点など、その表記上の異同については特に取り上げない。

なお、以下で挙げる用例の所在は作品名、成立年、依拠本のページなどで示した。引用の際、踊り字・漢字表記などで一部表記を変更した箇所があり、依拠本における振り仮名は必要と思われるもの以外は大幅に省略した。

2. 「なまじ(つか)」の歴史的変遷過程

2.1 様態副詞用法

「なまじ(つか)」の最も古い時期の例は、管見の限り、『日本書紀』と『万葉集』に見られる*1。まず、『日本書紀』の例(4)は、天智八年(669年)十月条の藤原鎌足の死亡記事への分注として編纂当時の既存書物である『日本世紀』(高句麗僧道顯の著)を引用しているもので、その『日本世紀』の記事は既存の漢文をもととして、語をなら

べかえたものとみられる。次の(5)～(10)の漢籍・仏典をみると、(4)の「不慙遺」が慣用的に用いられていることがわかる。この「慙」*²について(5)の『毛詩正義』の箋注では中国古代の字書(『爾雅』)を引用し、「慙」に「願・強・且」などの訓があるとしながらも、「強」と類似した意味で「心には欲しないが自ら強いるまたはつとめることを表す語」と記述している*³。

- (4) 辛酉、藤原内大臣薨。日本世記曰、内大臣、春秋五十、薨于私第。遷殯於山南。
天何不淑、不慙遺耆。(辛酉に、藤原内大臣薨せぬ。日本世記に曰はく、「内大臣、春秋五十にして、私第に薨せぬ。遷して山の南に殯す。天何ぞ淑からずして、慙に耆を遺さざる) (『日本書紀(下)』*¹) 卷第二十七・372頁・720年)
- (5) 不慙遺一老俾守我王(箋云 慙者心不欲自彊之辭也(中略) 慙 魚覲反爾雅云願也強也且也)(慙に一老を遺して我王を守ら俾めず。〈箋に云く、慙は心欲せず、自ら彊ふるの辭也。慙は魚覲の反。爾雅に云く(慙は)願の意、強の意、且の意なり。))
(『毛詩正義』卷第十二・鄭玄箋(漢)孔穎達疏(唐)7C頃)
- (6) 夏四月己丑、孔丘卒公誄之曰、旻天不弔不慙遺一老、俾屏余一人以在位。
(夏、四月、己丑に、孔丘卒す。公之に誄して曰く、旻天弔らず、慙く一老を遺して、余一人を屏いて以て位に在らしめず。)
(『春秋左傳伝注疏』卷第六十・杜預注(晉)孔穎達疏(唐)7C頃)
- (7) 光於宇宙、朕用垂拱負辰二十有餘載。天不慙遺一老、永保余一人、早世潛神、哀悼傷切。(宇宙に光れり。朕用て拱を垂れ、辰を負ふ。二十有餘載。天慙に一老を遺し、永く余一人を保たず。早世、神を潛め、哀悼傷切。)
(『三國志』卷二・魏書二・陳壽撰(晉)3C頃)
- (8) 方頼大猷以拯區夏、天不慙遺、早世薨殂、朕用痛悼干厥心。(方に大猷を頼て、區夏を拯んとす。天慙に遺さず。世を早く薨殂す。朕用て厥の心に悼む。)
(『晉書』卷六十七・列傳第三十七・房玄齡等撰(唐)646年)
- (9) 慙然(…魯衰公誄夫子云天不慙遺一老考聲云慙傷也…) (魯の衰公に子を誄して云く、天慙に一老を遺さず。考聲に云く慙は傷むの意なり。)
(『一切經音義』卷第九十五・慧琳撰(唐)8C後頃)
- (10) 孔丘誄曰。旻天不慙遺耆老。莫相子位焉。嗚呼哀哉(孔丘、誄に曰く、旻天慙に耆を遺さず。子に相する位にあらず。嗚呼哀哉。)
(『北山録』卷第四・宗師議第七・神清(唐)8C後頃)

このように考えると、(4)の「慙」は、「強いて・つとめて」という意味に訳すことができ、和語の「なまじひ(に)」の意味におおよそ対応するものとして(4)の訓読文のように古くから「なまじひ(に)」という訓が付けられてきたと見られる*⁵。これは語源的に「なまじ(つか)」が「なま(生)」と「しひ(強ふの連用形)」から成り立

っていることとも関連していると思われる。加えて、「強」との類義的關係からは、「慍」に「あながち(に)」という訓読も可能性としてはあり得ると考えられる。この「なまじひ(に)」の漢字表記の問題については、上代から近世までの訓点資料や辞書類を調査した佐藤茂(1959)を参照されたい。

つまり、(4)の『日本書紀』を含め、後述する中古の和化漢文資料に見られる「慍」は、おそらく和語の「なまじひ(に)」に対応するものと考えられるということである。したがって、上の(4)を次の『万葉集』の例と合わせてみると、(4)は内大臣(藤原鎌足)の死を悼みながら、「神様よ、どうして無理にでも老人の鎌足をこの世に残さなかったのか」と悔やんでいるということであり、(11)は物思いにふけているのを人に見られまいと思つて、「つとめて・無理に」普段の顔つきをしようとしてもできないということである。これらの例において「なまじひ(に)」は連用修飾の形で後続する動詞述語の「遺す」「思へりあり(顔つきをする)」という行為を「強いて・つとめて・無理に」行う様子を表している。

(11) 物思ふと人に見えじとなまじひに(奈麻強尔)常に思へりありそかねつる

(『万葉集』巻四・六一三・759年頃)

この「なまじ(つか)」の「強いて・つとめて・無理に」という意味は、次の中古の和文資料および和化漢文資料にも引き続き見られる。中古の和文資料に見出される例は管見の限り以下で挙げる例13、15、16が全例であるが*⁶、(14)のような和化漢文資料にはここに挙げた例の他に44例見出される。おそらく、古記録・古文書など中古以降の和化漢文資料には多く使われていると思われる*⁷。

まず、次の(12)～(16)の例をみると、(12)は上の(4)と同じく、死を悲しみながら「どうして無理にでも一人の後覚者(後継者)なりとも残さなかったのか」と悔やんでいるということであり、(13)は、この四年間、無理にでも身を捨てることができず思い悩んで過ごしているということである。(14)は二度も三度も断っている申し出を無理に引き受けるということである。(15)は思いわずらつてやつれた顔を鏡に映しながら詠んだ歌で、「つとめて、無理をして」やつと涙が止まって落ち着いたのに、鏡に映された自分を見て再び涙が溢れ出るということである。(16)は皇女(女二宮)との縁組という本来なら許されないことを、無理にまたは敢えてお許しいただいたということである。これらの例においても「なまじひ(に)」は、後続する動詞述語の「遺す」「身を捨てる」「引き受ける(請申)」「涙を止める(または落ち着かせる)」「許される」をつとめてまたは無理にでも行う様子を表すものと考えられる。これらの例のなかで、例(15)(16)の「なまじひ(に)」は連体修飾節のなかで使われているが、意味的には他の例と同じく、連用修飾の形であくまで後続する動詞述語の様態の内容を詳しく表すものといえる。

- (12) 我今收涙訴眞々 わ なみだ めいめい うらた 我れ今涙を収めて眞眞に訴ふ
 何不愁遺一後醒 なまじひ いっこうせい のこ 何ぞ愁に一後醒を遺さざる

(『菅家文草』詩編卷第二・174頁・900年)

- (13) 荒玉の年の四年を愁に身を捨て難みわびつゝぞすむ

(『躬恒集』一五五五四・924年頃)

- (14) 相談、再三辞退、然而強以相示、愁以請申、即令啓事由…(相談、再三辞退し、然り而して強ちに相示を以て、愁に請申を以て、即ち啓事令む由…)

(『小右記』長保一年十一月十八日・999年)

- (15) ものおもひにをとろへにけるかほをかゝみのかけに見はへりて
なましみにとまれるかほをけさみれは鏡やつらき涙とまらず

(『藤原為頼朝臣集』247頁・10C末頃)

- (16) (柏木)「ことわりや。数ならぬ身にて、及びがたき御仲らひになまじひにゆるされたてまつりてさぶらふしるしには、長く世にはべりて、かひなき身のほども、すこし人と等しくなるけぢめをもや御覽ぜらるる、とこそ思うたまへつれ、…」

(『源氏物語』若菜下・272頁・11C初)

次の例(17)(18)は内容的に似ている例で、(17)は今の盛大な行事(歌合)のありさまをそのまま後世に伝えるのは難しいことだが、お言い付けにしたがって(文章では伝えにくいことを)「つとめて・無理をして」書き記すしかないということである。

(18)は人生の黄昏時に昔の思い出の梅の花を再び眺めながら、花の姿は昔と同じだが自分のように老木になってしまった梅の木に対する感情を堪えきれず、拙い筆ながらも「つとめて・無理をして」粗末な歌を詠むことしかできないということである。いずれも、ここまで見てきたように、「なまじひ(に)」は(17)の「記す」(18)の「詠む」のような動作・行為を表す動詞述語を修飾する様態副詞用法として使われている。

- (17) …於戯、當時勝趣後代難傳。今依教旨、愁記盛事而已。(於戯、当時の勝趣後代に伝え難し。今教旨に依って、愁に盛事を記すらく而已。)

(『長元八年閏白左大臣頼通歌合』長元八年五月十六日・1035年)

- (18) (詞書き)往年參安樂寺聖廟、望砌下梅花、紅艷香氣差勝衆花、今臨暮年又對此花、花貌雖同已爲老樹、仍不堪情感、愁詠蕪詞奉呈別當阿闍梨に。(往年安樂寺の聖廟に参りて、砌下梅花を望む。紅艷香氣差だ衆花に勝る。今暮年に望み又此花に對す。花貌同じと雖も已に老樹と爲る。仍って情感に堪えず、愁に蕪詞を詠じて呈別當阿闍梨に奉る)

(『大納言經信集*8』185頁・11C後)

平安後期の『今昔物語集』には、管見の範囲では天竺部・震旦部には例が見られず、本朝部にのみ例が見られた。次の例をみると、「なまじひ(に)」はここまでの例と違

って、「なまじひ (に) 動詞述語のテ節、後件 (動詞述語。)」のように、テ節のなかで使われているのが分かる。では、次の用例を見てみよう。

(19) は僧から清水寺への同行を誘われた別當が、行く気がないにもかかわらず、僧の言葉に従わないわけにはいかないと思い、僧の誘いを「渋々、不承不承」と引き受けるということである。(20) は修二月会という法会までに「無理にでも、なんとかして」生き延びるということであり、(21) は女の言うことに従って、渋々一緒に行くということである。これらの例において「なまじひ (に)」は、そうしたくないが、またはできないことを知りながらも、自らまたは他人から動作・行為を強いられ、無理にもそうせざるをえない様子を表していると思われる。このなかで (19) (20) の「なまじひ (に)」は、上記で挙げた例と同様に、後続する「請ける、(一緒に) 行く」を修飾し、「強いて・つとめて・無理に」その動作・行為を行う様子を表しているが、他人からの要請が強えられるという文脈的状况から、「強いて・つとめて・無理に」という原義から、「(そうしたくないが) 仕方なく・しぶしぶ」という意味が派生したものといえよう。このような意味をもつ例は、以下で挙げた例のほか、『今昔物語集』に4例見出された。

(19) 而ル間、得意トスル僧ノ同様ナル有リ。十八日ニ云ク、「我レ、今日、清水ヘ参ル、君ヲ相ヒ具シテ参ラムト思フ、何ニ」ト。別當、心ニ非ズト云ヘドモ、僧心ニ不違ジト思フ故ニ、慙ニ可参キ由ヲ請テ、相ヒ具シテ参ヌ。

(『今昔物語集』卷第十三・第四十四・268頁・12世紀前半)

(20) 今昔、東大寺ニ戒壇ノ和上トシテ明祐ト云フ人有ケリ。此ノ人、一生ノ間、持斉ニシテ、戒律ヲ持テ破ル事无シ。(中略)「我レ、持斉ノ時、既ニ過ヌ。亦、我レ、命終ラム期近シ。何ゾ、忽此レヲ可破キ。此ノ二月ハ寺ニ恒例ノ佛事有。我レ、『此ヲ過サム』ト思テ、慙ニ生タル也」ト。

(『今昔物語集』卷第十五・第三・351頁・12世紀前半)

(21) 女、尚「極テ大切ノ事也。只具シテ御セ」ト云ヘバ、男慙ニ具シテ行クニ、女、「糸喜シ」ト云テ行ケルガ、恠ク、此ノ女ノ氣怖シキ様ニ思エケレドモ、

(『今昔物語集』卷第二十七・第二十・504頁・12世紀前半)

以上、これまで見てきた上代・中古における「なまじ (つか)」は、「なまじひ (に) + 動詞述語」「なまじひ (に) 動詞述語のテ節、後件 (動詞述語。)」の文構造のなかで、後続する自分または他人の動作・行為を表す動詞述語を修飾し、「強いて・つとめて・無理に」またはその派生的な意味として「仕方なく・しぶしぶ」という様態的意味を表している。

2. 2 中間段階—評価的意味の発生

中世の用例は、次のように軍記物語や説話に集中して現れるのが特徴的である。そして、今までの上代・中古の例にも見られる「なまじひ^{いひ}(に)」の用法が依然として使われているが、中世に入ってから、次の例のように(22)の「なまじひなる」や(27)「なまじいの」の形の連体修飾用法が初めて見られる。以下、軍記物語と説話に分けて挙げておく。(次に挙げる用例のほかにも、軍記物には15例、説話物には12例見出される。)

【軍記物語】

(22) はうかつなことを放言してしまつて仲間が一人もいないということであり、(23) は人のことばかり恨んでいては、往生をしたいという願いも叶いそうになく、中途半端にやり損じてしまったことである。(24) は大納言は不愉快にまたは引け目を感じるように思われて、立派な行為だとは思わないが、止まらなくてもよいのに止まってしまったということである。(25) は皆は鎧など重い物を背負つたりして飛び込み沈んだのが、この人おやこ(宗盛と清宗)は鎧どころか、「よりによって」お二人は優れた水泳の達人であることになかなか沈まないということである。次の(26)は「なまじひ(に)」の前件によって、その結果として「仲悪くさせられ、領地は奪われ、腹を立てたので給仕もおろそかになる」などといったよくないことが続いていることである。これは中途半端でいい加減なことまたは不適切なことを言い出したことがきっかけになって、後件の悪い結果が起こつたということにつながっている。(27)は直ちに仇討ちを実行せずに生きることまたは命の無事は、生きていなくてもよいことで、無駄に生きるということである。

(22) 纒^{わづか}に馬^{ひま}の口^{くち}に付^{つき}たる舍人^{とねり}男一人ぞありける。心のはやるまゝになまじひなる事はいひちらしつ、伴者は一人もなし、さればとて又とつてかへすべきにもあらず。

(『保元物語』巻中・102頁・1186年頃)

(23) うき世中のさがなれば、身のうきとこそおもふべきに、ともすればわごぜの事のみうらめしくて、往生のそくはいをとげん事かなふべしともおぼえず。今生も後生も、なまじみににしそんじたる心ちにてありつるに、かやうにさまをかへておはしたれば、日比のとがは露ちりほどもものこらず。

(『平家物語(上)』巻第一・106頁・1240年頃)

(24) 大納言にが^ましうはづかしうおもひ給ひて、「一門をひきわかれてのこりとどまたる事は、我身ながらいみじとはおもはねども、さすが身もすてがたう、命もをしければ、なまじみにとどまりにき。そのうへは又くだらざるべきにもあらず。

(『平家物語(下)』巻第十・287頁・1240年頃)

(25) みな人はおもき鎧のうへに、おもき物をおうたりいだひたりしていればこそしづめ、この人おやこはさもし給はぬうへ、なまじみにに究竟の水練にておはしければ、

しづみもやり給はず。 (『平家物語(下)』巻十一・339頁・1240年頃)

(26) 工藤一郎は、なまじいの事をいひだして、叔父に中をたがはれ、夫妻のはかれ、所帯はうばわれ、身をおきかねて、膽をやきける間、給仕も疎略になりけり。

(『曾我物語』巻第一・66頁・14C後頃)

(27) 時致いふやう、「(中略) …もしし損ずるものならば、悪靈・死靈となりて、命をうばふべし。なまじいなる命いきて、あけくれ思ふもかなし。今度いでなん後、二度かへるべからず、おもひきりて候は、いかゞ思召候」。

(『曾我物語』巻第五・212頁・14C後頃)

(28) 陶山、河野に向つて言ひけるは、「何とも無き取り集め勢に交はりて軍をせば、なまじひに足纏ひに成りて、懸け引きも自在なるまじ。…」と言ひければ、

(『太平記』巻八・222頁・1371年頃)

(29) 中書王の副將軍脇屋右衛門佐、「言ひ甲斐無き者どもが、なまじひに一陣に進みて、御方の力を失ふこそ遺恨なれ。ここを散らさでは叶ふまじ」とて、

(『太平記』巻十四・475頁・1371年頃)

(30) 「…蟻螂が降車を遮るに異ならず。なまじひなる軍して、言ひ甲斐無き敵に合はんよりは腹を切らん」と、將軍は仰せられけるを、

(『太平記』巻十六・551頁・1371年頃)

【説話】

(31) は仕方なく、お付き合いしたまたは参加したということである。(33) は(31)と同じく「仕方なく・しづしづ」ということである。(34) は競馬で勝った教延に応援する者がなく、褒美として与える衣服が与えられない状況で、そこにいた総指揮官が仕方なく教延に女郎花の単衣を引っかけてあげたということである。(35) は、供奉のために呼ばれた兼國が、身だしなみを整えるようにと殿下に注意され、仕方なく、いい加減に鬘を搔き上げて供養するということである。(32)(36) は、鎌倉時代の仏教関連の資料の例である。これらの例は内容的に似ており、出家し僧になったもののまじめに修行せず、中途半端に行うさまを表している。

(31) 昔、玄敏僧都と云ふ人有りけり。山階寺のやんごとなき智者なりけれど世を厭ふ心深くして、更さらに寺まじの交まじはりをこのまず。三輪河(わかは)のほとりに僅かなる草いほりの庵いほりを結びてなん思おもひ入りつゝ住すみける。桓武(くはんむ)の御門みかどの御時みとき此事このこと聞きこしめして、強あながちにめし出しければ、遁のがるべき方かたなくてなまじひにまじはりけり。

(『発心集』第一・一話・11項・1216年頃)

(32) 今はいづれの浄土にかむまれぬらんと返す返すゆかしく思ひやられて侍るぞや。我らがなましいに家を出て衣は染めぬれどはかばかしき信心をも発さず深山に思ひすます事なくて年のいたづらにたけぬぞ。

(『撰集抄』巻二六話・820行・1250年頃)

- (33) 大納言辞退シ申サントセラレケルニ、匡衡ヲマネキテ、「辞表ヲ奉ラムト思フ間、時英才齊名・以言等ニ詭ヘシムトイヘトモ、ナラ心ニ不叶。貴殿ハカリソ書ヒラカレト思フ」トイハレケレハ、匡衡ナマシヒニ請ケ取テ、家ヘ帰リテ愁歎ノ気色アリ。
 (『十訓抄』下巻・第七・19頁・1252年)
- (34) 敦延勝にけり。(中略) 敦延に方人總頭せざりければ、院、頻に方人をめされけれども、まいる物なかりけり。右方の奉行の將にて、大炊御門右大臣の中將にておはしけるぞ、女郎花の織ひとへを、なまじみにうちかけられける。敦延その祿を鞭にかけて、肩にはかけざりけり。(『古今著聞集』巻第十・287頁・1254年)
- (35) 松殿攝籙の御時、春日詣とかやに、秦兼國をかりにめされたりけり。其比までは、府の役力なしとて、きはざりけれども、いと面目なき事なれば、びんをもかきあげず、いま／＼しげなるかちぎにてまいたりけり。殿下そのよしを聞召て、引つくるひてまいるべきよし仰くだされければ、なまじひにびんかきあげて供奉しけり。
 (『古今著聞集』巻第十六・409頁・1254年)
- (36) 凡そ智者の持犯は輒く其罪福知り難し。其意測り難し。愚僧が如なる矇昧の族、慙に髮を剃り、衣を染めたるを衣て、僧の名を借たれども、大小乗の律儀中に、一戒をも不守。
 (『妻鏡』仮名法語・167頁・1300年頃)

これらの例をみると、中世の用例において、それまでとは違った特徴といえるのは、まず「なまじひ(に)」の修飾内容に、上代・中古の例に見られる「遣す」「参る」「記す」などの動作・行為を表す動詞のほか、「し損じる」「究竟の水練にておはしける」「足纏ひに成る」のような行為性が希薄なものが現れていることを指摘できる。つまり、ここまで見てきた「なまじひ(に)」は、自分または他人の動作・行為を表す動詞述語に対して、それによって生じた好ましくない結果または状況ともいえるものが現れている。

さらに、(24)(31)(33)(34)のように、「強いて・つとめて・無理に」という原義からの派生的用法も引き続き見られるが、構文的には平安後期に見られはじめた「前件テ節、後件」の構造で使われている。しかし、意味的な関係には、平安後期の用例とは違って、「なまじひ(に)」の前件の後に、よくないまたは好ましくない結果が続くという否定的な意味関係が成り立っている。このようなテ節の前件と後件の関係に原因・結果という意味の関係が読み取れるようになっていく。また、中世以降から(22)(27)のように、連体修飾用法で使われることが多いのが特徴的で、連体修飾の場合に中古までは見られない「中途半端な様子やしなくてもいいことを無理にする様子」という意味合いが顕著に読み取られる。

このほかに、次のような例が見られるが、意味的には上記の用例と同様である。(37)は(芸を身につけようとする人が)よくできないような間は、(習っていることを)人に知られないようにするつもりだと自分の行動に対する意志を述べている。(38)は中

途半端な、いい加減な連中と契りを結ぶということである。

(37) 能をつかんとする人、「よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ。うち／＼よく習ひ得てさし出(で)たらんこそ、いと心にくからめ」と常に言ふめれど、

(『徒然草』巻二・第五百十段・215頁・1330年頃)

(38) 其ほか世々の歌人の説にも、われらを稲負鳥、ましらの聲などへてよみをく和歌を人知らずや、恐らくは系圖にをきては誰人にか劣るべき。なまじみなるやからに身をそめ何かせんとおぼしめし、つねは岩の間にて花を見、秋は木々のこずゑにては月をながめ、万の木の実を愛し、いとやさしき色好みにておはしける。

(『のせ猿さうし』290頁・室町期)

以上のように、中世に入ってから、「なまじ(つか)」の意味・構文上に変化が見られはじめる。形としては連体修飾形が見られはじめる。構文的には、平安後期から見られる「なまじひ(に)前件テ節、後件」の構造が引き続き見られるが、その意味的關係は、前件で「しなくてもいいことをするさま」を行った結果として後件に好ましくないことが続き、「なまじ(つか)」の修飾内容が「好ましくないこと」として否定的に捉えられるようになる。「なまじ(つか)」がテ節で使われ始めるのは、平安末期からであるが、そのときのテ節は二つの事柄(動作・行為動詞述語)を並列して述べるもので、前件と後件の間は順接的・継起的に結ばれていた。それが中世以降になって初めて「テ節」に前件によって生じた好ましくない後件が起こるといった否定的な意味をもととした因果關係が現れる。また、平安後期のテ節と違って、中世以降のテ節には、動作・行為を表す述語以外に、行為性の希薄な事柄いわゆる否定的な意味の形容詞述語や否定形などが使われている。

ただし、中世までは、動詞述語を修飾して無理に行う様子という用法も混在している。一方で、「強いて・つとめて・無理に・しぶしぶ」と行ったことが好ましくない結果につながって、このような好ましくない結果を招く動作・行為または行為性の希薄な事柄に対して、すべきではないまたはしなくてもいいという否定的な評価の意味が発生する。このような意味は、中途半端でしなくてもいいことをする様子を表す様態的な用法ももつ過渡期的用法のようである。

2. 3 陳述副詞用法の拡張

近世初期の書写ではありますが、中世後期の言語事情を反映しているとされる抄物やキリシタン資料に例が見られる(「なまじひに」のほかに「なまじひな」の形も見られる)。

まず、抄物の例をみると*9、(39)はお呼び出しになって、そのうちに寵愛もなく(恋人に)棄てられるはめになるという、よくない結果が続いている。ある行為を行ったこ

とが、かえってよくない結果になってしまう」ことであり、「なましいに」の修飾内容をしなければよかったこと、しなくてもよかったことと否定的に捉えている。

(39) 此扇ハ始終トモニ巫山ノ雨ノヤウニシテアルベキコト也。ナマシイニ召出シテ、ヤガテ棄テラルハ、ガ恨也。
(『中華若木詩抄』59頁・1520年頃)

次に17世紀初頭成立の『日葡辞書』(1603～04年)の記述をみると、中古までの中心的な意味である「ある動作・行為を強いてまたは無理に行う様子」から転じた「物事を中途半端に行う様子」という意味が、完全な状態に物事がうまく運べないことという意味につながり、「不適當で、不適切なやり方や様子」を表す語と解されるようである。ここで注目する点は、(40)の中に「愁の事を言はうよりも無言致いた(Namaxijno cotouo iuō yorimomugon itaita.)」という例が挙がっていて、それに「的外れのそぐわないことを言うよりも、むしろ黙っている方がましであった。」と語釈があるところである。

(40) Namaxijni. ナマシイニ(愁に)やり方が適切でないことについて、あるいは、時機やその他の事情にぴったりとそぐわないことについて、説明する言い方。¶ Xeiua namaxijni vōqinaredomo, iccō¹⁾ buchōfōna monode voriaru(せいは愁に大きなれども、一向無調法な者でおりやる)彼は、背丈の方は大きいけれども、それにふさわしくはありません。と申しますのは、すこぶる無頓着であり役には立たないからです。¶ Namaxijno cotouo iuō yorimomugon itaita. (愁の事を言はうよりも無言致いた)的外れのそぐわないことを言うよりも、むしろ黙っている方がましであった。 ※1) iccōの誤り。▶Namajiini.
(『邦訳日葡辞書』445項*¹⁰⁾)

上記の例を見ると、「なまじ(つか)」の意味は、上代から中古の「ある行為を強いて、無理に行う様子」を表す様態副詞用法から、中世以降から現れ始めた「中途半端で、しなくてもいいことを行う様子」を表す評価的な意味を含んだ様態副詞用法にともに、次第に中途半端な状況を不適當なものとして捉え、それをするよりはしない方がいいという話し手による評価を表す陳述副詞用法へと展開していくことがわかる。このような陳述副詞用法は、近世に入って増えていくことになる。

では、近世の用例を確認してみよう。近世の用例はジャンルに偏りなく得られた。形としては近世後期から「なまじ、なまじつか」が見えはじめる。以下に挙げる用例において、話者を口、話者の台詞を「」、唄を√で示した。

以下の用例を見ると、近世における「なまじ(つか)」は、構文的にも、中世からの連体修飾用法は引き続き用いられているが、テ節と連体修飾節以外に「ては、だけに、

ばかり」による条件節に使われている。また、例(50)(54)の「なまじなま中」のような表現が見られ、近世の「なまじ(つか)」は半分や中間などの意味が、中途半端で不完全または不十分であることを表す語へ発達することとも意味的類似性がある。

- (41) 乱舞時過る酒盛に、正躰なく呑酔たるもの、慾に家に帰らんと思ひ、たどる／＼あゆみけるが、ころもししハす寒のまへ、雪も霜も白妙なる水堀のありしをわたりかゝり、ひたものふみまよひ、ふかき処に入ぬ。

(断本『醒睡笑』巻之五・1623年)

- (42) たとへば世尊の涅槃の日には、土民も似合の善根をなして、其佛恩を報じ奉るゆへに、丸もこの會を在家にてとりおこなはず、光明院にて執行せしなり。其身に似あひにあはずと穿鑿するは、なまじゐの人数に指をおらるゝほどの人の事なるべし。丸がごとき凡下は其さたにもおよぶべからず。

(歌学『戴恩記』上・57頁・1644年頃)

- (43) もし其の内召捕られずは最期といふ時は、白髪頭を大地の底へすり付けて。命も身代も願ふといふは其の時よ。なまじひ親がかくまふと聞えては先に我が立つて。許したうても許されぬ親下人にも見放され。愛目をする^{うきめ}と聞えてはげには先に憐み有り。(浄瑠璃・世話物『大経師普曆』・240頁・1644年)

- (44) むかし、なましゐにもものしりかほして、ある墓所の碑の銘見るものあり。その文に長谷河石見忠聖と云有けれハ、長谷の河石見れハたゝかたしとよミたり。

(断本『私可多咄』巻之一・1671年)

- (45) 我なましひに明朝先帝の朝恩を報ぜんと。二度此の土に歸參し功もなく…

(浄瑠璃・時代物『國性爺合戦』287頁・1715年)

- (46) イヤ子細も五さいも有事じゃごんせぬ。高で爰は盗人の内でごんす。其門口に立んすこなさん。身の廻りが貫ひたさに。あいらが働くのでごんすわいの。こなさんも爰へ来たは百年め。整に腕だてさんすが其身のひし。必まんぞくで去のふとばし思はんすな。マアそふ思ふて居やんせと。

(浄瑠璃・時代物『鎌倉三代記』・218項・1781年)

- (47) おちよくをつれて五郎八ハ、なまじうき世にながらへて、ひとの手塩にかゝるよゝ、今川橋どんふりとゆかんとせしが、とつくりと亦も心をと直し、今われ／＼が二人り共ちりれんげの身とならバ、

(断本『笑ふ門』瀬戸物道行・文化頃(1804-17))

- (48) 「…為朝は鬼が嶋に往来し、鬼はらはを将て帰れり。彼定めて神変不測の癖者なるべし。慾に出あひて、不覺をとるな」と罵りつゝ、門戸を鎖して裡に入れねば、

(『椿説弓張月』後篇巻之二・287頁・1808年)

- (49) 利勇これを可とせず、「…もし慾に首里を攻て、その軍利あらずは、毛を吹疵を

求むるなり。只固く守りて、兵を強くし、居ながら武威を張るにしかじ」とて…
〔『椿説弓張月』拾遺卷之三・214頁・1811年〕

- (50) **佐介**「ハアア、さア～～小三さん、さア一つ。」と、云はれて小三は詮方なく、床の間にある三味線手に取り。√なまじなま中惚れたが恨み、惚れざ苦勞もせまいもの。」(人情本『仮名文章娘節用』二編・卷之中・383項・1831年)
- (51) 丹次郎「時にお米、おら手めへにいつぞは云はふと思つてみたが、いや／＼何もかも世話になつて居ながら、いやらしい亭主ぶつて、妬心もできすぎたとさげしみもしようし、なまじい言出して、そんならどふとも勝手にしろと突出されても、立派には口のきけねへ身分だから、なりつたけど了簡して居たが、
(人情本『春色辰巳園』初編卷之三・283頁・1833～35年)
- (52) **お房**「政吉さんお歸りか」**政吉**「ライ／＼おいらの娘か。よくおとなしく待て居たの。ドレ／＼お土産をやるの」ト笑ひながら、鼻紙へ書たどぎをお房に見せる。**お房**「ヲヤ／＼有難ふ」ト明てよむ。√なまじ、ていよく離別ただけに、日柄立ほどおもひ出す。**お房**「ヲヤ／＼沢山書て有ねへ。後で楽しみによまふや。
(人情本『春色辰巳園』後篇卷之五・320頁・1833～35年)
- (53) **清吉**「そりゃア言はずと知れた事。跡へ残して父さんに、余慶な苦勞をかけるより、一所に殺して連れて行ハ。」**さよ**「思へばいつぞや瀬瀬川へ、身を投た時二人り共。」**清吉**「死んだらこんな憂き目も見めへ。なまじ命があつた斗り。」
(歌舞伎・世話物『小袖曾我藍色縫』468頁・1859年)
- (54) **雁八**「…茶焙がなからうから、反古紙にでも包んで焙じなよ。ドリヤー走り往つて來ようか。」と、出で行く後にホツト息、獨りつく／＼思ふやう、なまじなま中助かりて、死ぬにも勝る憂き苦勞。此の間に愛を逃げ出でて、前なる川に沈まんと、
(人情本『春色恋廻染分解』二編・卷之上・211項・1860年)
- (55) **七吉**「ア、ねえ、もう三月と言つても僅だから、疾く頼んで置ませう。」**母**「上着は何にする積。」**七吉**「然様さねえ。なまじつかの物よりやア、畝織を三つ紋に染めて貰はうぢやないか。」**母**「餘り質實み過ぎやアしないか。」
(人情本『花曆封じ文』二編・卷之中・283項・1866年)

近世の用例はジャンルに偏りなく例が得られるが、擬古文の性格が強いとされる『椿説弓張月』に特に例が多く見られた(総31例)。しかし、『椿説弓張月』の例は上代・中古の用例と同様に、「強いて・つとめて・無理に」の原義をもち、それから転じた「無駄に、辛うじて、中途半端に」という意味で使われている例もある一方で、構文的には上代・中古・中世のものとは違って「なまじひに+動詞述語」の構造ではなく、テ節によって後続文につながっている。(48)は、「きつと神の如く不思議に変化する悪者だろうから、うかつに彼(為朝)に立ち向かつて失敗をするな」ということ。(49)は直

ちに敵を攻撃したとしても軍利がないことになる、相手を破ろうとしたことがかえって自分が敗れることになる恐れがあるとし、「首里を攻める」ことは中途半端でなくともいいことであり、止した方がいいと見ている。

以上のように、中世末期から近世までの「なまじ(っか)」は、中世以降から見られた前件と後件をテ節で結んで、その後件に好ましくない結果が現れる場合の例も引き続き見られるなかで、前件と後件の否定的な意味関係を、テ節以外にも条件節で結ぶという例が見られ、陳述副詞用法が広がっていくのが分かる。中世以降から生じた「中途半端で、適切でない」という評価の意味が、近世に入って、評価的な意味を表すために構文的にも修飾範囲が広がり、動詞述語から一つの事態を表す文全体にかかる修飾範囲の拡張により、中途半端な行為や様子による不適當で不適切な状態は、好ましくないまたは望ましくないものと捉えられ、それは止した方がいいという評価の意味に展開していく。このような意味特徴から、比較構文などにも使われはじめる。

2. 4 陳述副詞用法の定着

近現代語における「なまじ(っか)」の用例^{*12}を見てみると、次のように中世以降から見られる連体修飾形は近現代にも引き続き使われていることが分かる。(以下で挙げる近現代語の用例は、雑誌『太陽』の日本語コーパス、『(CD-ROM版)新潮文庫の100冊』『(CD-ROM版)新潮文庫明治の文豪』『(CD-ROM版)新潮文庫大正の文豪』から検索したものである。)

(56) 學問の經歷は、學問上には信用あるべけれども、文學は別才也。否、なまじっかの學問は、反て文章、輕文學の才の發達を妨ぐることなしとせず。

(大町桂月「文芸時評」『太陽』1901年5号)

(57) しかもこの御姫様は御氣象も並々ならず御濶達でいらっしやいましたから、なまじいな殿上人などは、思召しにかなうどころか、すぐに本性を御見透しになって、…

(芥川龍之介「邪宗門」1918年)

(58) 「まあ、補助金問題は、これで忘れよう。われわれは独力でモルヒネに成功し、危機を乗り切って進んできた。政府からなまじっかな補助金など、もらわないほうがいい。不平や依頼心は精神的な自殺のようなものだ。…」

(星新一『人民は弱し官吏は強し』1967年 (=例3))

そして、近世から見られる原因・理由の順接確定条件節の例に加え、近現代語には次の(62)のように順接仮定条件節に使われる例も見られはじめる。このほかに、(59)のような逆接仮定条件の例も1例^{*13}見られる。本調査で集めた近代以降の「なまじ(っか)」は、主に複文の従属節(確定・仮定条件節と連体修飾節)に現れる。これらの例

においても、「なまじ(っか)」は修飾領域の事柄がかえってよくない結果をもたらさうる、不適切で望ましくないものであると見なし、それをしない方がむしろいいという意味を付け加えている。このような不適切な状態にある事柄をしない方がむしろいいという「なまじ(っか)」の意味特徴によって、「なまじ(っか)」には近世後期に見られるはじめ上の(65)(66)のような「なまじ～より(は)、～方がいい」「～{なら・より)、なまじ～方がいい」といった比較構文に使われる。

【条件節】

- (59) 兼「夫りやアなまじお前さんから意見を被成ツても陀目だ僕の意見で諦めの附様な間柄ならお前さんの耳へ入れねえで諦めさせるだけけれども到底陀目だと…」
(糸野探菊「涙の媒介」『太陽』1895年6号)
- (60) 序だからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になった上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだったがなまじい、おれの云う通になったのでとうとう大変な事になってしまった。
(夏目漱石『坊っちゃん』1906年)
- (61) 子供と違って大人は、なまじい一つの物を十筋二十筋の文から出来た様に見窮める力があるから、生活の基礎となるべき純潔な感情を恣まに吸収する場合が極めて少ない。
(夏目漱石「思い出す事など」1911年)
- (62) 靴を穿いてる運轉手は、『あああ』と欠伸をして、(中略)怒つてゐるやうにひとりごとを言った。『なまじっか一寝入りすると眠い。それに寒いや。』
(三上於菟吉「新刊紹介」『太陽』1925年14号)
- (63) 「お前は班長殿、班長殿って、俺達について廻ってるが、いい加減にした方が、いいんだぜ。(中略)班長ってのは、兵舎じゃ可愛がってくれるが、前線じゃ、なまじ戦争を知ってるだけに、冷たいもんだよ。…」(大岡昇平『野火』1951年)

【連体修飾節(主に比較・選択のヨリ節)】

- (64) その日の朝から何んとなく頭の重かった葉子は、(中略)それと共に激しい下腹部の疼痛が襲って来た。子宮底穿孔綺。なまじっか医書を読み嚙った葉子はすぐそっちに気を廻した。
(有島武郎『或る女』1913年)
- (65) 「…今に君が其所へ追い詰められて、どうする事も出来なくなった時に、僕の言葉の思い出すんだ。思い出すけれども、ちっとも言葉通りに実行は出来ないんだ。これならなまじいあんな事を聴いて置かない方が可なつたという気になるんだ」
(夏目漱石『明暗』1916年)
- (66) 「…ただ然し、心の誠だけはどんな時にも失わないように、出来るだけのことをしてやってくださればいいんだ。なまじっか他人行儀に大切がられるよりは、貴方の思うままにして貰った方が、結局あれの仕合せだろうと思うから、それでこ

んなことを云い出したのさ。…」

(里見弴『多情仏心』1923年)

- (67) 死んでは困る私、生きていても困る私、酌婦にでもなんでもなってお母さん達が幸福になるような金がほしいのだ。なまじっかガンジョウな血の多い体が、色んな野心をおこします。
(林芙美子『放浪記』1928～29年)

上記の例において、「なまじ」の話し手は(65)の「あんな言葉を聴いたこと」、(66)の「他人行儀に大切にされること」が不必要でかつ不適切であると判断し、それをするよりは他の事柄をしたり、それ自体をしない方がむしろいいと思っている。このように、比較選択の構文に使われる「なまじ(っか)」には、不適切な状態にある事柄を行ってかえってよくない結果をまねくよりは、それをしない方がむしろいいという否定的な評価が顕著に表れている。近代以降「なまじ(っか)」の陳述副詞化はますます進行していき、主に複文の従属節のなかに固定して用いられるようになるといえる。

3. 評価的意味の発生過程

「なまじ(っか)」は、上代・中古の「強いて・つとめて・無理に」意味から次第にその意図的な意味という行為的な意味が薄れ、中途半端な状況を表すようになり、近世後期から現代に至っては、その中途半端な状況に対して好ましくないと否定的な判断を表すようになっていく。このような<意図的な様態>からある行為や物事に対する<否定的な評価>への意味変化の過程をまとめてみる。

上代から中古にかけて、「なまじ(っか)」は動詞述語に前接して、「遺す、思ふ、許す、参る、申し出す」などが表す行為または様態を「強いて・つとめて・無理に」行うことを表す様態副詞的な働きをしていた。このような意味は「なまじ(っか)」の語源である動詞「強いる」の意味に拠ると考えられる。このような意味は、望んでいないことを強いられた状況のなかで「仕方なく・しぶしぶ」行う様子を表す意味につながっていく。このときの動詞述語は、人間の行為を表すもので、「強いて・つとめて・無理に」の意味は、自分や他人の動作・行為を表す場合であり、「仕方なく・しぶしぶ」の意味は、何かまたは誰かに触発されてその行為を行う場合である。いずれの場合においても「なまじ(っか)」は意図性かつ故意性の存在する状況下で使われている。

このような意味は、中世に入って「なまじ(っか)」は「なまじひに」の形に加え、連体修飾の「なまじいなる、なまじいの」の形としても使われ、それまでとは違った「中途半端でしなくてもいいことをするさま」という用法が見られるようになる。これに加えて、「なまじ(っか)」を含む文がテ節によって、複文構造で使われる例が多く見られる。このテ節による「なまじ(っか)」の節と後続文との意味関係を見ると、その後続文に好ましくない事柄が続いている。上代・中古の「強いて・つとめて・無理に(→

仕方なく・しぶしぶ)」の意味合いをもつ「なまじ(っか)」が、「テ節の前件と後件」という構造のなかで、物事を無理に行い、その結果として好ましくないことにつながるという意味関係のなかに使われるようになったことで、「強いて・つとめて・無理に」行った行為が好ましくない結果を招く恐れがある中途半端なものとして捉えられるようになる。また、物事を中途半端に行うことを表す「なまじ(っか)」は、テ節のほかにさまざまな原因・理由の条件節に使われるようになる。これは、中途半端なことをすると好ましくない結果につながるという意味構造になり、さらに、「そのようにしなくてもいいのに、そのようにしてはいけない」という意味が生まれ、その結果として「なまじ(っか)」に行ったことが好ましくない結果をまねくことになるので、そのような中途半端なことはすべきではない、またはしない方がいいと解釈され、「なまじ(っか)」の修飾内容に否定的なとらえ方が生じることになる。要するに、中世以降から、連体修飾やテ形接続に使われる例が初めて見られ、「なまじ(っか)」の修飾内容の前件とそれに続く後件との間に否定的な意味関係が生まれ、上代・中古までとは違った用法が発生したと考えられる。

このような否定的なとらえ方を見据えた「なまじ(っか)」は、近世に入ると、好ましくない結果を招きうる中途半端な行為をすることは避けて、その代わりによりいい選択をするように、別の選択肢を提案する比較・選択構文に使われはじめる。

近現代語において「なまじ(っか)」は、陳述副詞用法がさらに広がった。「強いてつとめて・無理に」という意図的な行為を表す用法は背後に退き、中世以降「無理なことをした結果として好ましくない結果につながる構文」のなかで生まれた、「中途半端でしなくてもいいことをする様子」という用法が次第に広がり、近現代語の「なまじ(っか)」の用例の多くが、複文の従属節に現れ、主に条件節と比較・選択のヨリ節(および連体修飾節)という二つの構文パターンのどちらかに固定して使われ、中途半端な状況が好ましくない結果へとつながることを見据えて、ある事柄に対して「不適切である」という否定的な評価を表す。ただし、中世以降から見られる連体修飾用法(なまじひなる、なまじひの、なまじっかな)は、現代語にも中途半端でしなくてもいいことをする様子を表す様態的な意味として使われている。

4. おわりに

本稿では、「なまじ(っか)」を取り上げ、様態副詞用法から否定的な評価を表す陳述副詞用法へ歴史的な展開を追いながら、「なまじ(っか)」の意味・構文上における変化過程を考察した。

評価副詞の古代語における用法を調べてみると、現在とは違った用法を見せる語が多々ある。「なまじ(っか)」は様態副詞用法から評価性をもつ陳述副詞的用法への変化

が見られる語であるが、これに似たような変化過程は、「なまじ(っか)」のほかに「中々(に)、せっかく」においても見られると考えられる。今後もある語がどのような変化過程を経て評価的意味をもつ副詞になっていくのか、その評価的意味を獲得するまでの史的変遷やその変化要因を探っていきたい。

【注】

注1 「なまじ(っか)」の用例は、管見の限りでは奈良時代の古文書(東京大学史料編纂所古文書フルテキストデータベース)や『古事記』に見当たらなかった。

注2 本稿では「怒」を基本字とするが、旧字体としては「怒_レ」がある。

注3 例(6)の『春秋左傳注疏』の杜預の注には「怒且也(怒は且(しばらく)の意である)」とある。また、(9)の『一切經音義』の字義には「怒傷也(怒は傷(いたむ)の意である)」とある。このように漢語「怒」は「強いて・つとめて、しばらく(且く)」などの副詞としての用法と「願う/願わくは(例5)」「傷む(例9)」、さらに次の例のような「笑う」などの動詞としての用法をもつとされる。(次の訓詁文は吉川忠夫注(2004)『後漢書』第七冊列伝五・岩波書店による。)

例) 聘王母於銀臺 今、羞玉芝以療飢; 戴勝怒 其既歆兮, 又謂余之行遲。

(王母を銀臺に聘き、玉芝を羞めて以て飢を療す。戴勝は怒いて其れ既に歆び、又た余の行くことの遅きを謂る。) (『後漢書』張衡列傳第四十九・思玄賦・5C前項)

注4 『日本古典文学大系』(岩波書店)の頭注(373頁・注21)では、『左伝』の哀公十六条の引用し、例(4)の「不怒遺耆」を、「強いて(無理にでも、せめて)老人である鎌足をこの世に残さなかったのか」と注釈しているが、但し書きで「杜預注によれば怒を且(しばらく)と注する」と補足している。

注5 院政期(1177~81)に成立した『色葉字類抄(黒川家蔵、三卷本)』(中三六ウ)には、注2に挙げた旧字体「怒」のほかに「適・怒・強」に「ナマシヒ」という訓が付けられている。

注6 例17、18は和歌集であるが、例は見いだされるところは、漢文体の跋文と詞書きである。本文中に引用した用例以外は、以下の資料・索引を使用した。

小久保崇明・山田瑩徹編(1981)『土佐日記: 本文及び語彙索引』笠間書院、塚原鉄雄・曾田文雄編(1975)『大和物語語彙索引』笠間書院、佐伯梅友・伊牟田経久編(1963)『かげろふ日記総索引』笠間書院、榊原邦彦編(1994)『枕草子: 本文及び総索引』和泉書院、松尾聡・江口正弘編(1967)『落窪物語総索引』明治書院、上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・上田裕一編(1994)『源氏物語語彙用例総索引自立語篇』勉誠社、今西祐一郎・上田英代・村上征勝共編(1997)『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社、阪倉篤義・高村元継・志水富夫編(1974)『夜の寝覚総索引』明治書院、池田利夫編(1964)『濱松中納言物語総索引』武蔵野書院、塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子共編(1975)『狭衣物語語彙索引』笠間書院

注7 中古以降の古記録・古文書などの和化漢文資料の調査には、東京大学史料編纂所の「古記録フ

ルテキストデータベース (89例)・古文書フルテキストデータベース (22例)・平安遺文フルテキストデータベース (49例)・鎌倉遺文フルテキストデータベース (88例)」を使用した。(括弧中の数字は「愁」の出現例)

- 注8 『日本古典文学大系80』の頭注(185頁)では、「愁詠蕪詞」を「むやみに粗末な歌を詠んで」と訳している。
- 注9 本文で挙げた例のほかに、25例見られる。連体修飾形(なまじいの)は1例、残りの24例は「なまじいに(23例)、なまじい(1例)」の形で連用修飾用法である。
- 注10 『日葡辞書』(『邦訳日葡辞書』p445)には、「Namajiini」のほかに次の語が挙げられている。
- ・Namajijna. ナマジイナ(愁な) 事がうまく運ばないとか、うまくあてはまらないとかなどの理由によって、むしろそうでない方がよいような(こと)、あるいは、やり方が適切でないような(こと)。 ▶Namaxijna
 - ・Namaxijna. ナマシイナ(愁な) むしろそうでない方がよいような(こと)、または、適当でない、ぴったりとしない(こと)。 ▶Namajijna.
 - ・Namajiini.³⁾ ナマジニ(愁に)副詞。 ※1)本書の一般表記法ではNamajijni。 ▶Namaxijni.

注11 鎌倉前期の『字鏡集』(寛元本)の「整」に「イマシム・ツクロフ・ナマジヒ・ナマジヒニ・トトノフ」などの訓がある。

注12 本調査で得られた近現代語の例は全62例で、そのなかの58例が複文の従属節に使われている。その残りの4例は連体修飾形で使われる3例と単文で使われる1例(注13)である。

注13 本調査で得られた用例のなかに、「なまじい」の形で単文構造で使われている例が1例あった。この例においても「なまじい」は、「この女とは先刻の「縁」がある」に対する「そうでなくてもいいのに」または「そうあってほしくない、望ましくない」と思う話し手の気持ちちがによって現れている。

例)「女、手をはなせ」と、庄九郎はいった。(中略)「放さぬ」小宰相はますますしがみついてきた。庄九郎は、閉口した。なまじい、この女とは先刻の「縁」がある。あの「縁」がなく、見知らぬ者ならば、庄九郎は法華経を念誦してやりつつ蹴落したであろう。

(司馬遼太郎『国盗り物語』1963~66年)

【調査・引用資料】

本稿に掲載した用例の出典と用例調査に使用した資料・索引(注で挙げた資料以外のもの)は以下の通りである。

〔古代語〕万葉集・源氏物語：『日本古典文学全集』小学館、日本書紀・菅家文草・藤原為頼朝臣集長元八年関白左大臣頼通歌合・今昔物語集・保元物語・平家物語・曾我物語・古今著聞集・徒然草・のせ猿さうし・載恩記・大経師昔暦・鎌倉三代記・春色梅児誉美・椿説弓張月・小袖曾我薊色縫：『日本古典文学大系』岩波書店、小右記：東京大学史料編纂所古記録フルテキストデータベース、藤原為頼朝臣集：埴保己一編(1924)『続群書類従(和歌部)』第十六輯上・續群書類従完成会、太平記：西端幸雄、志甫由紀恵共編(1997)『土井本太平記：本文及び語彙索引 索引篇2』勉誠社、発心集：

高尾稔・長嶋正久（1985）『発心集 本文・自立語索引』清文堂出版、撰集抄：安田孝子ほか4名（1979）『撰集抄：校本篇』笠間書院；安田孝子ほか3名（2001）『撰集抄自立語索引』笠間書院；安田孝子・梅野きみ子ほか3名『撰集抄：上・下』新撰日本古典文庫・現代思潮社、十訓抄：泉基博編（1976）『十訓抄：片仮名本』古典文庫（第352冊、第359冊）；泉基博編（1982）『十訓抄：本文と索引』笠間書院、日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店、中華若木詩抄：『新日本古典文学大系53』岩波書店；深野浩史編（1983）『中華若木詩抄：文節索引（巻之上）』笠間書院、色葉字類抄：中田祝夫・峰岸明篇（1977）『色葉字類抄研究並びに総合索引 黒川本・影印篇』風間書院、字鏡集：中田祝夫・林義雄（1978）『字鏡集白河本寛元本研究並びに総索引』（『古辞書大系』一二）勉誠社、仮名文章娘節用・花曆封じ文・春色恋通染分解：曲山人『仮名文章娘節用』人情本刊行会編（代表：村上静人）人情本第7回（大正4年10月）；朧月亭有人『花曆封じ文』人情本刊行会編 人情本第12回（大正5年3月）；朧月亭有人『春色恋通染分解』人情本刊行会編 人情本第10回（大正5年1月）

〔近現代語〕大町桂月「文芸時評」・条野採菊「涙の媒介」・三上於菟吉「新刊紹介」：国立国語研究所『太陽コーパス：雑誌『太陽』日本語データベース、夏目漱石『坊っちゃん』・『明暗』・「思い出す事など』』文鳥・夢十夜』：CD-ROM版『新潮文庫 明治の文豪』、芥川龍之介『邪宗門』『羅生門・鼻』、有島武郎『或る女』、里見弴『多情仏心』：CD-ROM版『新潮文庫 大正の文豪』、大岡昇平『野火』、曾野綾子『太郎物語』、林芙美子『放浪記』、星新一『人民は弱し官吏は強し』、渡辺淳一『花埋み』：CD-ROM版『新潮文庫の100冊』

このほか、漢籍の検索には、台湾中央研究院の「漢籍電子文献」、仏典の検索には、中華電子仏典協会CBReaderを利用した。（春秋左氏伝注疏：『附釋音春秋左傳注疏』卷第六十（杜氏注・孔穎達疏）；鎌田正（1981）『春秋左氏伝四』新釈漢文大系第33巻・明治書院；国民文庫刊行会編（1920～21）『国訳漢文大成 経子史部第六巻 春秋左氏伝下』（国民文庫刊行）、『毛詩正義』一切經音義：『大正新脩大藏經』第五四冊No. 2128、北山録：『大正新脩大藏經』第五二冊No. 2113）また、断本は、『断本大系』（東京堂出版）の第一巻から第十六巻のデータベースから検索した。上記で挙げた人情本資料は、国立国語研究所のホームページに公開されている岡部嘉幸氏（千葉大学文学部）の人情本パッケージを使用した。

なお、上代から近世までの調査資料の成立・刊行年は、『国語学大辞典』（国語学会編）と国文学研究資料館の日本古典籍総合目録を参考にした。仏典の書誌については、小野玄妙編（1933～36）『佛書解説大辞典』（大東出版社）を参考にした。

【参考文献】

- 坂坂 元（1970）「なまじ（日本語の生態-3-）」『国文学解釈と鑑賞 35(7)』至文堂
工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所研究報告集 3』秀英出版
小松寿雄（1985）『江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版

佐藤 茂 (1959) 「なまじひ」考『国語国文学9号』福井大学国語学会
飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用語辞典』東京堂出版
森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店
渡辺 実 (1996) 『岩波テキストボックス 日本語概説』岩波書店

(いむ じよん 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)